三宅花圃についての一考察

―明治二〇年代の作品を通して―

片岡懋

三宅花圃は本名田辺竜子。明治元年一二月、東京本所に生れました。二五年一一月、政教社同人で、雑誌『日本人』を主宰していた雪嶺三宅雄二郎と結婚しています。花圃は近代女流作家としての最初の創作『藪の鶯』（発表時は『籔の鶯』）を発表した時に付けた号です。別号はひさご。

『藪の鶯』は春の屋主人坪内逍遙の校閲を得て、明治二一年六月金港堂より刊行されました。花圃が東京高等女学校（お茶の水の前身）専修科在学中に、家の都合が悪い為に、亡兄の法事の真似事も出来ないという母の嘆きを聞いて、逍遙の『書生気質』（明18・6～19・1）に倣って、当時の女学生の種々相を描き、若い女性の在り方を示そうとした作品です。

男　アハハハハ。此ツー、レデースは。パアトナア計お好で僕なんぞとおどつては。夜会に来たやうなお心持が遊ばさぬといふのだから。

甲女　うそ。うそ計。さうじや厶り升んけれども。あなたとおどるとやたらにお引張回し遊ばすものですからあの目がまはるやうで厶りますんで。其おことはりを申上たのですワ。

という若い男女の会話で書き始め、鹿鳴館の新年の踏舞会の模様を描き、ハイカラな女学生たちの風俗を写しています。ダンスをはじめ何事にも西洋風を好む篠原浜子と、両親の没後、毛糸編の内職をしながら弟を学校へ通わせ、その立身出世を願っている松島秀子とを中心に、画家志望の斉藤松子、教員志望の相沢品子、文学を好み、文学士に嫁して夫婦先稼ぎをするという服部浪子などが登場します。自我に目覚めて、それぞれに個性的な生き生を志している女性たちです。

処で浜子は、洋行後は何事にも西洋の風俗をとり入れるようになった父のもとで、学校の課業は二の次とし、ピアノやバイオリンなどの稽古や英語の勉強だけをなし、夜会や踏舞会には常に出席する女です。田舎育ちの母を旧幣と云って軽蔑し、家の内では常に我れ

一人の如くに振舞っています。彼女には父が定めた英国留学中の勤という許婚者がありましたが、英語の家庭教師山中と親しみ、やがて彼を愛するようになり、結局は帰国した勤から財産を分け与えられて、山中と結婚します。処が山中は芸妓あがりのお貞に唆かされて浜子の財産を処分し、お貞と駆落してしまうのですから、浜子の人生行路はその第一歩で破綻してしまったことが示されています。又画家や教員を志望して独身で過すと云っていた斉藤松子と相沢品子とはいずれも落着きのない、はねた性格の所有者として描かれ、更に学校卒業後『師範学校に入りて何れも才学を以て名を知られたりしが。兼ねてかたれる志のごとく。女学士にて夫をも持たず。一生を送りしや否や。其将来は知るによしなし』と書かれているだけです。

以上述べて来たので明かなように、斎藤や相沢は結婚して家庭に身の拘束されるのを嫌って自己の好みを生き通そうと考え、それを実行に移している人達ですから、新時代の女性として自己の道を積極的に生きていますし、浜子にしても激しく旧幣と対立し、父の定めた許婚者に頼ることなく、自らの好みを積極的に生きているのですから、その生き方が物質的、形式的方面に偏し、その考え方に未熟な点が多いという否定的な面は少くないにしても、新しい時代の風潮を積極的に生きようとする人の一人であり、人間が持つ逞しさを見ることも出来る筈ですが、そういう女性が恋愛結婚に失敗し、後悔に泣く存在としてしか描かれていませんし、斎藤、相沢についても上記のように冷やかにその結末を書いているに過ぎませんから、花圃がそうした生き方の意味については、考えようとしていないことは明かでしょう。

これに対して、服部浪子には女子も学問がなければ『中々善良の母も出来ますまい』から、何でも専門を定めてよく勉強すると共に、温順な女徳を損じないようにして、健全なホームの建設に努力することに『今の女生徒の大責任が有』ると云わせ、琴や茶の湯や和歌を女子の教養として挙げさせると共に、

『明治五六年頃には、女の風俗が大そうわるくなって。肩をいからしてあるいたり。まち高袴をはいたり。何か口で生いきな慷慨なことをいって、誠にわるい風ださうでしたが。此頃大分直ってきたと思ふと。又西洋では女をたつとぶとか何とかいふことをきいて。少し跡もどりになりさうだといふ事ですか

ら。今の女生徒の大責任が有ので厶り升』

と述べさせています。これは自由民権運動の中で男性に伍して政治運動をしたり、女性の参政権を要求していた景山英子や岸田吟子（後の中島湘煙）たち明治一〇年代の女性の言動をさし、それらを女性の本質を逸脱した行き過ぎとして非難しているのですから、女性が自らの自我解放の為に社会の表面に立って積極的な活動をすることを否定し、改良主義的立場を主張していることになります。花圃はこのような主張をする服部浪子を、その望み通り文学士の宮崎一郎と結婚させ、夫をして『何か読書でもしていて気の尽る時には。琴を弾せたり茶を入れさせたりして。少しは文学の相談もしたり。余程気の晴る事がある』と云わせているのですから、彼女が内助の功をあげ、幸福な結婚生活を送っていることを示しています。

更に松島秀子の場合でも、彼女は下田歌子の許で和歌や国文の勉強をして可成りの教養を身につけていますし、両親の没後は毛糸編の内職によって弟との生活を支えるだけでなく、弟を学校へ通わせ、自らも弟の復習するのを聞きながら勉強していますが、彼女の最大の目標は弟を立身出世させて、松島の家を興すことでした。そういう秀子が飛鳥山の花見で桜の枝に結びつけた和歌の短冊が縁となって勤と知るようになり、後に彼と結婚することになります。勤はケンブリッヂの学校を卒業し、技芸士の称号を得た新知識として帰国したのですが、西洋の学問と芸術に感心するだけで風俗や道徳は日本風を好み、従順の徳や斉家の道に励む『弾た性質に世界の酸素を交て。おてんばといふ化合物に』なっていない女性を理想の妻と考えていました。それ故に養父であった篠原子爵の死後、欧化主義の流行にかぶれた浜子を山中と結婚させ、自らは友人のすすめもあって秀子と結婚したのです。秀子は子爵夫人となったわけですが、彼女の弟もその後大学に入り、工学を修め、卒業後に一大土木の工事を監督して人に名を知られるようになり、秀子の望みも一応は達せられたことになっています。

浜子の場合とは異って、秀子や浪子が明るい調和的な世界を得たことが描かれていますし、それが時流に流されることなく、目覚めた自我を自主的に生きた結果、達成されるものであることも、一応示されています。従って人間の理想達成の第一条件として、人間の主体的な成熟を考えようとしている花圃であったこと

も一通りは髣髴されるのですが、秀子たちの成功がその生活態度の慎ましさや、斉家の道や内助の手腕に重点をおいて、妻を評価する男たちの立場に適応した生き方にあったことは明かなのですから、それだけ現実的で漸進的な方法が生きられていたわけですが、このように在来からの考え方や教養の範囲内で、自我に目覚めた人間として自己の可能性を生きることに、女性の理想的な在り方を見ていた花圃であったことも、はっきりと示されているわけです。

なお花圃が西洋崇拝に対して日本的な教養や道義の尊重を押し出したのは、明治一〇年代の極端な欧化主義に反対した国粋主義の台頭が見られた二〇年代初葉の社会情勢を反映しているのであり、そこに民族の自立を念願するナショナリズムの立場を指摘することが出来ますし、アメリカに独立をもたらしたワシントンや日耳曼統一を完成し、欧州に牛耳をとるに至ったビスマークよりも、電気を発明し、世界幾百の邦土、幾億の生民が利益をうける基を作ったフランクリンやスエズ運河を開いたレセップスを高く評価し、『大学でも政治や法律で卒業する者は。いづれも官員になるのだが。文学や工学で卒業するものに比しては皆学問は出来ないのがおほい』とあるのでも明かなように、官員（役人）を軽蔑し、役人になるよりも世の為になる事をしようと心掛けることが必要だとも書いて、役人が必しも世の為になることをしていないことを指摘し、官僚よりも技術者や芸術家を尊び、自分の力を他からの制約なしに、発揮し得る仕事にたずさわることを喜ぶなど、資本主義発展期らしい明るい個性尊重の立場も示されています。更に他人の世話にならずに一生懸命に両親の没後を生きようとしている秀子と、そういう彼女に対する周囲の人々の同情を描いて、誠実に生きる努力をしている人の可能性なり、人々の善意にも触れています。或は松島姉弟の会話を通して、一千五百円程の秩禄公債を得て新しい生活を開く為に東京へ出て来た両親が、相ついで亡くなってしまったことを書いて、維新によって生活基盤を失った没落士族の苦悩の一端に触れ彼等姉弟が故郷の親戚を当てにすることも出来ないで、他人の親切に助けられながら自活している処には一族離散の相を示すと共に、家の解体故に旧い道徳が崩壊し、独立自存を尊ぶ新しい道義の成立を捉えています。『藪の鶯』は種々の新しい時代の問題点なり特色なりにも触れているのです。

その上松島姉弟の生活には花圃自身の生活気分なり理想なりが反映しています。前に触れて来たように、花圃は亡兄の法事費用を得る為にこの作を書いたのですから、当時元老院議官であった父の生活は決して楽ではなかったわけです。書生などが可成り大勢いたようですから、表面的には派手な生活をしており、それ故の貧乏とも考えられないことはありませんが、旧幕臣であった父は明治二年の外務少丞を振り出しに一〇年には大書記官まで進み、その後間もなく元老院議官になっていますから、西南戦争の終結と前後して政治の第一線から退いているわけです。西南戦争の勝利によって反政府勢力を圧倒した明治政府が幕臣出身の官僚を官界の第一線から後退させたのではないかとも思われますが、そうした地位の変化が生活に影響し、それが父母を失った松島姉弟の生活として描かれていると考えることが出来ますし、秀子が内職で生活を支えている処には花圃の法事費用捻出の為に小説を書くという事が重ね合わされていると見ることも出来ます。

それだけに松島秀子の在り方に対する同情共感には真実性を伺うことも出来るわけですが、小説を書けば法事費用ぐらい作ることが出来るだろうという彼女の考え方の甘さが、松島姉弟の生活を毛糸編の内職程度で賄えると考えてしまったのです。松島姉弟の場合と同様な題材を扱った作品に国木田独歩の『二少女』(明31・7『国民之友』)がありますが、この作の主人公は電話交換手の賃銀でも仕立物の内職でも弟妹との生活を維持し難い有様であることが書かれています。若い女性作家としてはやむを得ないことではあったと思いますが、眼を自己の周りの狭い範囲にしか向けることが出来なかった為に、両親を失った子供達の生活を覆う暗い影を十分に掬い上げることが出来なかったのです。その為に題材としては藩閥政府の内包する問題に触れながら、それを見極めるかわりに松島秀子の真面目な努力とそれに共感する人々の善意で、それが乗り切れるものと考えてしまったのです。日本の資本主義が、おくれて世界の資本主義体制に参加した為もあるのですが、封建的体制を内包する明治絶対主義政府と結びつき、それに保護されることによって、その成立の時から独占資本主義体制をとり、それを支える道義として封建的儒教的な、人間の従属的関係を規定する徳目だけが重視され、個人の独立とか自由とかいうこともその体制の維持、推進に役立つ限りに於てしか

認められなかった現実の所有する問題点を見極めることの出来ないままに、憲法発布を約一年後に控え、軽工業中心の資本主義体制も一応整って来たが故に、近代国家としての成立期を迎えた日本の社会の表面的な明るさを額面通りに受け取って、明るい歌をうたってしまった花圃でもあったのです。だから『藪の鶯』は一応は上に見て来たように明るい作品になり得てはいるのですが、それは二〇年代初葉の社会の表面的な明るさを反映しているに過ぎず、当時存在自していた我拘束の悲劇という暗側面には殆んどかかわりを持つことが出来なかったのです。観念的な理想を明るく描いた作品と定評される所以です。

このような傾向は『橋松佳話』（明27・4～8『女学雑誌』）にも見られます。この作品は橋本庄太がその努力によって貿易商として成功し、更に妻操子や友人たちの助けを得てその事業を拡大して行くことを書いて、人間の力の偉大さを明るく讃美したものです。小田原海岸で魚屋の手伝いをしていた橋本庄太はたまたま避暑に来ていた松田侯爵父子に見出されて、その世話で東京へ出て学校に通うようになります。徒らに人の世話になることを好まない庄太はやがて侯爵の家を離れて牧場に住み込み、牛の世話や牛乳配達をしながら学校に通っていましたが、その間に世の動きを見て材木の清国売込みを計画し、それに成功して貿易事業家として一人前になります。そんな庄太を憎からず思うようになった侯爵の娘操子は、父の死後兄の世話で、母の反対を押し切って彼と結婚します。彼等は新婚旅行をかねて庄太の故郷八丈島から小笠原諸島へ渡り、そこで庄太の父に会います。父の話から彼が大名の子で、お家騒動のごたごたから八丈島へ流されて来たことや小笠原開拓に努力してきたことを知り、伊豆七島、小笠原諸島近海の水産資源獲得の手掛りを得ただけでなく、彼が操子の母と縁者の関係にあることも知ります。帰途暴風雨に逢い、船は難破し操子はガァム島に漂着して助かりましたが、庄太は行方不明になってしまいます。東京へ帰った操子は兄などと相談して、貿易会社を経営しながら海産物加工会社や紡績会社を新設し、アジア諸国並びに南洋との貿易殖民の仕事を始めることになります。その手始めとしてアジア大陸の奥地や安南、シャム、ビルマ、インド、フィリッピン、濠州、ニュージーランド等の調査を企て、調査団を幾組か編成します。その壮行会の

席に行方不明であった庄太が無事な姿を現わします。

以上が『橋松佳話』の梗概です。これでも明かなように物語的性格の濃い作品ですし、肉付けの薄い筋ばかりのものでまるでメモをつなぎ合せたような作品なのですが、殆んど無一物で他人の物置小屋に住んでいた庄太が自己の智慧才覚と努力によって一人前の貿易商となり、すぐれた妻を得て、その助けを借りて更に事業を発展させ、暴風雨で難船し漂着した無人島でも地味豊かな土地を発見して将来の計画を練っていることなどを描いて、彼の逞しさと崩折れない努力がどれ程豊かな結果を得たかを示すと共に、操が家柄に拘泥することなく結婚の対手を選び、不幸に崩折れることなく夫の事業を推し進めて行く処に新しい時代に生きる女性の積極的な姿を描くなど、自我に目覚め、自己の道を自主的に生き抜く人間を明るく肯定的に描き出していますし、侯爵の娘や大名の子供たちが商工業によって新しい人生を切りひらいて成功している処には、ブルジョアジィが社会の中心的勢力を占めるようになって来た時代の反映を指摘することも出来ます。

が、庄太を大名の後裔にしたり、操子の父を侯爵としている処には、人間の性格や生き方に身分や家柄との関連を考え、身分や家柄によって人間の優劣を考えようとする花圃であったことも示されていますし、或は紡績工場の経営責任者夫妻が労働者たちと一緒に働くことによって、経営者と労働者との間に面白からぬ感情を生じ、同盟罷工などのおこらないように注意していることに触れたり、新しい燃料機関の発明による費用の節約に触れて、新しい工場経営の在り方を示してはいますが、それが『財産平等の社会党のごときものの起』るのを防ぐことを目的としたものであったり、アジア、南洋方面の調査をして貿易殖民の事業を発展させようとする処には、日清戦争で勝利を収め日本をアジアの中心的な国家として位置付けることに成功し、ついでその資本主義的発展を周囲の国々に向け経済的勢力圏を確立しようとしていた政治家や資本家の考え方と共通したものを見ることが出来ます。夫雪嶺の影響は無論あったことと思いますが、花圃自身が支配階級の立場に立って、日清戦争の勝利による解放的気分を謳歌していたことが示されていることは云う迄もありません。従って資本主義体制の一応の確立によって増大して来た国民の間に於ける貧富の差や、それ故の下積みの民衆の生活にまつわりつく暗さに、気

付いていないわけではありませんが、そこに問題を見て社会的不平等について考えようとか、庶民階級の犠牲の上に発展する独占資本主義の問題点について考えようとする姿勢は全くありません。だから裸一貫で出発した庄太が極めて順調に成功することを朗かに書くことも出来たのです。一般民衆の背負っている暗さを見つめ、そこにある問題点を剔抉し、解決した上での明るさになり得ていないのです。

そんな花圃ですから『萩桔梗』（明28・21『文芸倶楽部』）では折角戦争が家庭生活に及ぼす悲惨な影響に触れていながら、それを日清戦争後の三国干渉で遼東半島を清国に還付することになったのを知って憤慨した為に戦場で負傷した夫の症状の悪化したことに、原因を限定して考えているにすぎません。

このように人間個人を拘束する暗側面にも触れてはいますが、そこにある問題点を十分に解明することは出来なかった花圃でしたが、それなりに暗側面を可成りはっきりと打ち出した作品もあります。例えば『蘆の一ふし』（明23・1『女学雑誌』）や『八重桜』（明23・4～5『都の花』）に於ては、すぐれた知識を有ち、物の道理も弁えており、役所で必要とする人間でありながら、上役にお世辞をつかうことが出来なかった為に、役所を馘首されてしまった男のことを描いていますし、『八重桜』では『おへいおへいが上手だものだから』出世し、自分が出世すればかっての同僚を悪しざまに罵るような男も描かれています。当時の役所が学問や能力の有無によって、人間の地位や待遇を決定するのではなく、出身地とか上役の気にいるか否かによってそれが決められる所であり、上役が自分の意のままに部下を支配し、しかもそういう風潮に順応して得意になっているような人間で構成されていたことは捉えられています。が『蘆の一ふし』では馘首された主人公に同情した友人が主人公の娘をドイツに留学する息子の嫁にし、娘の弟を海外で修業させることにして、主人公の心を慰めています。友情の尊さとそれが暗さを打破することを描いているのですが、明るさの強調が馘首される前後の面白くない気分をまぎらす為に酒量を増した主人公が、その為に倒れて亡くなってしまったことを片隅に押しやってしまっていますし、息子のドイツ留学は官命ですから、主人公の悲劇を繰返さないという保証は何処にもないのですが、そうした点への顧慮は全くありません。却っ

て多くの留学費が官から出るので、娘の弟を伴って行けるというのですから、まるで公の難有さを示すようなことにさえなってしまっているのです。『八重桜』にしても、非職になった上に病気の為にすっかり零落してしまった男の娘八重が、家の窮乏を救う為に、かっての父の同僚で世渡りの巧みな男や貴族竹園の処に奉公し、竹園の子を生んでしまった為にかねてから恋しく思っていた男から結婚を申し込まれてもそれに応ずることの出来ない身になってしまったことを嘆きながら、彼に対する義理から髪を切って尼のような生活を送る決心をしているのですから、一人の女性の一応は自我に目覚めながら、父の失職や男の性慾の為に朗らかに自我を生き得なくなってしまった悲劇を描き、上流社会の男の頽廃的な生活態度にも触れているのですが、作者は女性の自我拘束の悲劇として描き切るかわりに、八重の生んだ子供がある貴顕の養子となり、生母を慕う処から彼女がそこへ迎えられることになり、かっては主筋に当った男と同等以上の地位になり得たことに喜びの涙を流す八重の姿を描いているのですから、上記の問題については全く考えていない作者であることは明かでしょう。しかもその主筋に当る男というのは、かって八重が奉公していた家の娘が親の定めた許婚者を嫌って結婚した男なのですから、自由恋愛を否定する作者がそれと対称的に家族の為に、自己を犠牲にした八重の生き方を肯定し、讃美しているのです。一方では子供の母を慕う無邪気な自然の気持が封建時代的な身分制度による人間の拘束を打破する力であり得ることを示唆し、人間が自己の自然な感情を嘘偽りなく生きることの必要さとその意味とを示しているのですが、女性の自然の感情の発露として恋愛を生きた人間を否定的に扱い、恋する心を抑えた人間の方に幸福が来たような書き方をしているのですから、自然尊重の意味が、本当には理解されていなかった花圃であったことになります。しかもここでも社会的な身分のよさと結びつくことが女性の幸福の一つのように書かれているのですから、花圃の形式的な権威主義の一面も示されています。

が『車の轍』（明24・3『女学雑誌』）『苦患の鎖』（明24・6同上）『枯尾花』（明24・12同上）になると、女性の自我の目覚めとそれを拘束するものを一応は正面から取り上げるようになっています。『車の轍』では学生時代に、勉強を手伝って貰った男を恋するよ

うになった女主人公が、会社社長で金満家の評判高い人から嫁に欲しいと云われた時に、その人が初老の歳でしかも三度目の結婚というのにすっかり乗気になった父にすすめられて、見合いもせずに嫁ぐのですが、その年の冬避寒をかねた湯治に出掛けた時に、たまたま来合せた初恋の男と連れ立って歩いていたことを、彼女に横恋慕している男が夫に密告したことから離縁されてしまいます。対手の財産に惑わされた父の心と若い女性を次々と妻にする男の性慾とエゴイズムなどが女主人公の心を蹂躙してしまったことが描かれています。

『苦患の鎖』でも晩の食事に帰って来ない日が多い夫であるにも拘らず、妻が自分の自由な生活を持つようになるとそれを嫌い妻の意志の自由を拘束し出来るだけ家庭に縛りつけておこうとし、妻が出掛ける時には一緒に行ってその行動を監視することを描いて、男のエゴイズムを浮き上らせていますし、『枯尾花』では継母の金の無心から婚家にいることが出来なくなってしまった女を描いていますから、個人の自由を拘束する家の問題、親のエゴイズムに触れています。尤も娘を苦しめる母親を継母としている処のには継母、継子いじめという在来からの形式をうけついでおり、子供の自我を拘束することになっている家の本質に触れようとする姿勢は弱められていますが。なおこの作の場合も夫の出世に従って妻の交際範囲が広がり、妻が自分の世界を持つようになったことを面白く思わない夫が妾を有ち、妻を離縁するとすぐその女を家に入れているのですから、妻の自我を認めようとしない夫の字在も描かれているわけです。

以上見て来たので明かなように、女性の自我の目覚めやその確立を妨げるものとして、子供の自主性を考えない親のエゴイズムや妻を自分の意のままにしようとする夫の我執に触れてはいますが、花圃はいずれの場合にも女性の至らなさ、不熟さにその不幸の原因を求めようとしています。勿論女性自身の主体的未成熟故に周囲の情勢に流されてしまったと云うことも出来るのですが、もともと子供や妻を私物視し、自己の我執を満足させようとする親や夫の生き方を認めて来た社会の慣習や、その上に成り立っていた道義の下に抑圧された生活を生ることを余儀なくされて来た女性であったことを考えれば、彼女たちの主体の確立されていないことに原因を求めること自体おかしなことで

す。しかし過去の封建時代的な習慣や道徳を利用している資本主義体制の内包する問題点を指摘するのではなく、却ってそういう体制を肯定する側に立っていた花圃でしたから、女性をとりまいている客観的条件に問題の所在を見るかわりに、女性の内部に原因を求め結局女性の自ら招いた悲劇と考え、従って女性の内面的な成長や自己抑制のみを解決の方法と考えざるを得なかったのです。が『枯尾花』の女主人公は夫の家にいることが出来なくなって、結婚するまで生活していた学校に帰えるのですが、教師は彼女に同情してくれるだけで、彼女がどのように生きたらよいのかは教えてくれません。その為に結局どうすることも出来なくなった彼女は死ぬ決心をするのですが、これでも明かなように、当時の教育は女性が自主的に生きることを教えるものではありませんでした。勿論まだ女性が経済的独立を得るような社会ではなかったのですがそういう社会を作り出そうとする努力も教育界には乏しく、女性教育と云えば所謂良妻賢母型の女性を作り忍従を美徳として教えることが目的だったのです。従って『車の轍』に於ては女主人公に『慈愛深き親は、慈愛に眼くらみて、しらずしらず我子の心を枉ぐる事有、そをあきらかにいひひらきて、やさしく反省を乞ふは、子のつとめなり、この務尽さんには、よくよく学問して是非弁まへらるる年頃にいたるを待つべし』と云わせて、教育による女性の主体的成熟を問題解決の最大の鍵と考えた花圃も、教育の世界に最後の拠り所を求めた『枯尾花』の女主人公を絶望させる外なかったのです。

こうして女性の自我解放の道の険しさに触れた花圃は『痣番人』(明25・6〜7『乙の巻女学雑誌』)でどうしようもない拘束の下に生きる人間を描いています。この作は若い男女のほのかな愛情がまだそれとあらわにされない内に、火事の為に女は死亡し、男は大火傷で顔に痣をこしらえて、不調和に終ってしまったことを書くと共に、男を看病している間に彼を恋するようになった牧師の娘は、顔の痣を恥じて彼女の求婚を断った男が教会の番人として一生独身で過す決心でいることを知り、自分も生涯独身で伝道に尽そうと決心したことを書いています。自我を朗らかに生きられなかった人々のことが描かれています。この作の場合にはどちらの親たちも子供の気持を理解しています。当事者たちも自己の善しと信ずる処を、一生懸命

に生きようとしているのです。それにも拘らず恋は不調和に終らなければならない現実だったわけです。善意に生きる人間は却って悲しみを背負わなければならないのです。が、作者にはその原因が捉えられなかったちとは直接関係のなたのです。だから主人公い火事という自分たちの力ではどうしようもない偶然によって、その運命を支配される人間の悲しさを描いてしまったのです。それだけ目覚めた自我を生きようとする人々には暗い現実であったことは反映させ得ても、その暗い不調和な現実の前で具体的現実的に自我を生きることを諦めた人間の悲しさを凝視し得ないままに、宗教に救いを求めようとした花圃だったのです。『枯尾花』の女主人公には死を暗示していますが、人間の生をいとおしんでいる花圃でもあったわけです。

そんな花圃が芸術に救いを求めた人間を描いたのが『露のよすが』（明28・2『太陽』）です。新華族の娘露子は子爵広橋竹麿と見合いをしますが、美しい女ではなかった為に不調に終ります。その為に一生を美術に捧げようと決心し、やがて彼女の描いた富士の絵が竹麿を感動させたことを書いています。一度は彼女を否定した人間に彼女の価値を認めさせるだけの絵を書くまでになった露子を描いているのですから、個性的な生に目覚めてそれを生き抜く人間の明るい可能性が示されているのですが、作者は竹麿に讃められたのは『幾千人のほむるよりうれし』と云った露子を書いて、彼女の女らしさを描くことに主眼をおいてしまった為に、彼女が芸術一筋に生きていることにそれ程積極的な意味を与えてはいません。結局露子が自己の純粋な気持を持ち続け得る処として設定しているだけです。そういう芸術の世界と対比的な世俗的世界では彼女が美しくないというだけの理由で、その希望を朗らかに生きることを阻まれてしまったのですから、そこでは人間の価値がその内面とは全く関係なく、唯表面的な美醜によって決定されていることを捉えているのですが、作者はそういう考え方を批判的に眺めようともしていません。生れながらの美醜によってその生き方が決定される処に人間のはかなさを見ているのです。人間は結局自分の力で自己の運命を切りひらいて行くことが出来ないものである故に、せめてそうした不調和な世界の中で自己の心を純粋に保とうと努力しているのです。そうすることによって生じて来る僅かな可能性を待とうとしているのです。露子がそうで

したし、『八重桜』の八重がそうでした。『痣番人』の牧師の娘もそうした人の一人でした。『藪の鶯』の松島秀子もそうです。『橋松佳話』の操子でさえも自分の意志で積極的に庄太を夫に撰んだのではありません。花圃の共感を寄せた女性は皆そうした人でした。

このような花圃の特色をはっきり示している作品に『空行月』（明29・8『国民之友』）があります。幼くして父に死別し、母の手一つに育てられたお須磨は一三の歳より芸妓となり、ある医学生を恋し、彼が卒業するのを楽しみにしていたのですが、彼は故郷に起った大地震で両親の安否もわからないままに急いで帰国してしまいます。その後彼からの便りもない為に、お須磨は医学生の事を思いながらもある男の妾になってしまいます。が、その後も何かと理由をこしらえては宿下りして、彼の写真にむかって日頃の憂さ辛さを心おきなく述べるのを唯一つの楽しみにしています。そんな彼女がある日主人の妻の嫉妬故に母の許に逃げ帰ると、其処に彼女を訪ねて来ていた医学生を見出します。彼は帰郷後家の後始末に追われて、彼女への便りも書けないでいる内に、思わぬ処より養子に望まれどうしても断ることが出来ないで結婚してしまったのですが、養家の娘が亡くなったので、昔の契りを忘れずに彼女を訪ねて来たと話します。別れて以後のそれぞれの生活を知った二人は、それぞれが約束を破ったのは『互の罪、二つなき心をこころとして、これよりは昔の二人、今までのことは、とひ、とはれぬが、をかしからん、いざと手をとり』医学生の故郷へ行き、円満な家庭生活を始めたことが書かれています。明かにこの作にはその境遇の変化にも拘らず、互に恋する心を持ち続けていた二人であった故に、最後には調和的な世界の到来したことが示されています。が、故郷の地震故に二人は別れ、その後男は養子となり、女も妾の生活を送り、たまたま男の妻が亡くなった為に始めて二人が共に生活し得るようになったに過ぎません。積極的に自らの心を生き抜こうとする努力はどちらも全くしていませんし、彼等の自我を拘束するものを見つめようとする姿勢も見ることが出来ません。僅かにお須磨が主人を欺いて宿下りをして、彼の写真に語りかけているだけです。そうしたことしかなし得ない庶民の世界だったのです。幼い時に父親と死別し、色街の中に母の手一つで育てられ、三味線の音の中で成長したお須磨に、主体的成熟への努力が見れないの

は兎も角として医学生にもそれはなかったようです。女子教育のみならず、教育全般に於いてそういうことが考えられていなかったわけです。しかも周囲に自我を生き得る世界を求めて闘う人を見ることも少なかったのです。自己の主体的成熟の為に努力することの必要ささえ知らない人々だったのです。そうした現実であることを、捉えた花圃でしたがそれをどのようにして打開したらよいのかは依然としてわからなかったのです。だからこの作でも上に見て来たように、地震による医学生の両親の死亡とかお須磨の幼時からの生活環境に彼等の不幸の原因を求め、偶然に左右される人間の不安定さを強く打ち出す外なかったのです。が、そんな中で生きる人々にも何らの光を与えようとした花圃でした。それがお須磨を自己の本当の気持だけは何としてでも大切にしようとする人間として描くと共に、そんなお須磨に医学生との幸福な結婚生活を送らせることにしているのです。が、彼女の幸福も医学生が再び訪れてくれたからもたらされたものであり、従って女は男の気持次第でその境遇を左右されるわけです。お須磨に去られ、妾の不実を知った主人がそれ以後妻を大切にするようになり、主人夫婦の間も円満になったと付け加えた作者は、女の幸福は『かはり安き、男気の其村雲のわざならんとか』と書いています。男のエゴイズムに問題の存することには気付いていますが、不調和な世界に生きなければならない女性の自我確立の方途は、依然として捉えられていない花圃であったと云わざるを得ません。

『藪の鶯』や『橋松佳話』に人間の明るい可能性を描いた花圃でしたが、それは結局憲法発布の前夜や日清戦争の勝利による一時的表層的な明るさを反映して書かれただけで、民衆の日常生活とは直接結びつくものではなかったのです。だから一時的な興奮がさめて周囲を見回した時に見出した、不如意な生を生きる女性たちに明るい可能性を与えることも出来なければ、中島歌子の家熟で同門であった樋口一葉のように、下積みの女性の苦悩を浮き彫りにし、目覚めた自我を生き得ない焦ら立ちを生々しく描くことも出来ないままに、偶然の力を借りて安易に薄明るい結末に持ち込んでしまったのです。写実主義の浅さが示されています。

（昭46・10・17）